

第3章（2015年 安の年）

世界の平「安」と暮らしの「安」全について考えた年

（公益財団法人発表から）

2015.1.18 今日の日経歌壇から

家業より離れて今日は海に来て展望台より太平洋を見る

（八戸 山村陽一） 選者：三枝昂之

選者評：離れ、来て、見る。山村さんの行為だけを示しているが、そこからは家族が身近な家業に勤しむ働き人の内面が浮かびあがる。重い責任とやり甲斐。一人になって海を見る姿は自分をリセットしようとする心そのもの。その小さなりセットが暮らしの中の誠実さを滲ませて味わい深い。

→家業は、生業、自営業を意味するが、代々、その家に伝わってきた職業や世襲的に継承していく技術や才能を指すこともある。何かの折に家業を離れて海や山の見える展望台に上って、ぼかんと時間を過ごし、自分をリセットする。

開業以来40数年続けている税理士事務所の生活に、特段大きな変化があるわけではないが、時には、仕事や世俗を離れ、自分をリセットしてみたいくなる。そんな時、こころ安らぐのは、海や山を見ることだ。日曜日の朝のテレビ番組で、美しい海や、野山の映像を見るのは楽しみのひとつだ。

高齢者になった私の友人、知人が行っていることで、私にはできていないことは、西国三十三所巡礼や四国八十八か所霊場めぐりの旅、体の頑強な友人は、日本百名山の登山、登頂など、それぞれに自分をリセットし、明日の元気をもらってくるのだ

ろう。

先日、急に関与先の会長が事務所に寄って来て「いま、一人で笠形山（939メートル）に登ってきた」と仔細を話してくれた。多可町大屋から登るのだそうだ。「いいことをしましたね」。この会長も少しだけ家業を離れてみたかったのだろう。

自分ひとりでは海にも山にも行けなくなってさびしいが、元気な間に、電車やバスで行ける三保の松原などの日本一美しい海岸と海、山なら富士山に、もう一度行ってみたい。

遠くに行かなくても、明石の大蔵海岸、垂水の舞子公園、芦屋の海岸くらいなら一人でも行ける。須磨海浜公園や六甲山頂も同じだ。いい日を選び、家業を「離れ、来て、見る」。それだけでよい。無為無策の時間を過ごしたいものだ。

2015.1.26 今日の朝日歌壇から

俊才がふるさと捨ててもどり来ぬ明治以来の地方の悲しみ

（西条市 村上敏之） 選者：高野公彦 選者評：なし

⇒今から35年前の1980年、当時の地域紙「新東播」正月号に「帰省中の青年に訴える」と題して投稿したことを思い出した。

以下抜粋

・在郷の青年の一人として考えることは、都会へ出て勉学を終えた、あるいは一定年限の就業を終えた青年を、そこに永住させる前に、もう一度Uターンさせられないものだろうか。能力と体力のある者は、そのまま都会に残って成功するそれは結構。ただ当然の如く都会に職を得て永住する前にもう一度郷土のよさとその発展を考えてほしいということである。

・青年諸君もまた、在郷の事業所に就業し、あるいは、郷土で事業を興すことを考えてみることだ。青年諸君、正月の帰省を機

会に緑の郷土、土の香の郷土を見直してみようではないか。君達にとって郷土は、必ずしも都会の大企業従業員を育てるための「肥育牧場」ではなかったのだ

⇒俊才ばかりか、多くの若者がふるさと捨ててもどり来ぬことを憂い、「もう一度郷土のよさとその発展を考えてほしい」と訴え、その受入方策について意見を述べている。

2012年2月に「人生夢浪漫」を上梓する際に、以下の通り意見を追加している。

「この提案に対する私の主張はことごとく裏切られている。地方の青年の多くは都市部に移り住み、都市部に勤務している。郷土に帰って新しい事業を起こす人は少ない。これは日本全国で起こっている現象であり、人口の都市集中と、地方の高齢化率を著しく高めている。都市集中を排し、地方を活性化して地方に雇用の機会を設け、人口移動の流れを大きく変えないことにはこの国の将来は危うい。

なぜ、明治以降、俊才ばかりか普通の国民までが、「ふるさと捨ててもどり来ぬ」ことになったのか。開国以来、当時の実質的治世者であり、知識人であった全国津々浦々の大名諸侯が東京に移り住み、東京が、学問、文化芸術、産業の中心になった。その結果、江戸時代の統治方法であった「緩やかな連邦制」とでもいう地方分権が力をなくし、中央集権が急激に進んだ。戦前に領土拡大を巡る戦争が続いたことや、戦後の情報社会の進展などもその理由だ。

北播磨は、平安の昔から気候風土に恵まれた豊かな土地だが、大きな市場をもつ伝統産業が生まれなかった。だが藩校が充実し、よく学問をした。その伝統はいまでも続いている。

安倍内閣の重点政策である「地方創生」で、「ふるさと捨てて

もどり来ぬ地方の悲しみ」から脱却したい。少子高齢、人口減少社会の理想は、地方の疲弊を避け、全国的規模で「超成熟社会」をつくることだ」。

2015.02.08 今日の朝日歌壇から

〈飛び立てず皇帝ペンギンになります〉と夢諦めし人からの
賀状 (神奈川県 九螺ささら) 選者：馬場あき子

選者評：若い人の夢が潰えてゆく今日の状況は悲しい。友人からの賀状は内容に反し少しユーモアのあるところがかえって心に沁みる。

アメリカへ海越え行こうと思っている大志を抱く金魚だ静岡
県

(東久留米市 関沢由紀子) 選者：永田和宏 選者評：なし
⇒若い人の夢が潰えていくことは悲しい。高卒後、50%を超える若者が大学に進み、4年後には、全国一斉に就職シーズンを迎える。学生は、何十社もの「就活」に挑戦し、ようやく内定をもらう。最近では、就職案内も入社試験票もネットで請求する。

少数の一流大学を除き、大卒など金の卵でも何でもない。世間では人手不足といわれているが、入社試験票すらもらえない大学生が大勢いる。特技なし、資格なし、インターン経験など誇れる人生経験もなし、あるのは、単純労働のバイト経験と普通自動車免許状のみ。大学の授業には真面目に出席したが、サークル以外の友人もできず、在学中に海外研修どころか、ろくに国内旅行の経験もない。これが普通の大学生活のようだが、これではダメだ。大学4年間は人生の夢のカタチを探し、それを掴む最高の機会であったはずだ。

就活生の間では、「求人募集を行う会社は、入社試験票を請求してきた大学生の学歴はもちろん、友人層やその人の関心や趣味まで事前にネットで調べる。フェイスブックなどにバカな書き込みを行っている、試験票すらもらえない」と言われている。大学4年間の人生経験が「入社試験」にプラスになるようにいろいろな経験を積んでほしい。やろうと思えばできるのだ。

若者諸君に言っておきたい。就職に失敗したから、夢がつかえる訳ではない。夢のカタチを変えて再度挑戦すればよい。夢と浪漫を求め続けることは若者の特権だ。従って、「飛べずに、ひたすら歩き続ける皇帝ペンギンになります」と夢をあきらめることもない。若者に期待したいことは「挑戦者の精神だ」。

静岡県では、金魚ですら、「アメリカへ海越え行こう」と大志を抱く」という。奈良県の大和郡山、愛知県の弥富、東京都の江戸川ほど有名ではないが、静岡県は、金魚の産地でもあり、金魚の輸出も行っている。「静岡県は金魚の形だ」ともいわれている。静岡県人ならすぐに伝わる「金魚と夢」の話だ。

「青年が、夢に向かって『闘志と努力と柔和』を失うとき、それはもう青年ではない。青年は、常に夢と浪漫を求め、無限の可能性に挑戦し、闘志を発揮して、この期待に応えなければならない」。これは私が何度も自著に書いたフレーズだ。がんばれ、若者たちよ。がんばれ、青年たちよ。

2015.03.08 今日の日経歌壇から

ポッキーが三本ずっと残っている一緒に食べるその日を待っている
(春日井 清美ひとみ) 選者：三枝昂之

選者評：三本のポッキーが待つ心を軽やかな楽しさにしている。

⇒三本のポッキーを残して、誰が、誰と一緒に食べたいと待っているのだろうか。たぶん、年老いたばあさん（祖母）が、小さなひ孫を待っているのだろう。ばあさんは認知症かもしれない。いつまで経っても子や孫やひ孫のことが気にかかる。

私ごとだが、先日から大阪に住む子と孫が家族そろって帰ってきた。最初の日の夕食は、自宅で家内の手料理だが、孫の希望でハンバーグ。次の日は、小雨の中、「東条湖おもちゃ王国」、夜は孫の希望でカレー屋さん、今日は「播磨中央公園サイクルランド」で遊び、お昼はラーメン屋さんに行き帰宅する。何のことはない。みんな孫のご希望だ。どこにでもある普通の幸せだ。

三本のポッキーを残してひ孫が来るのを待つ私のばあさん（96歳）は施設入所だ。要介護5、認知症があり、子も孫も、ひ孫も分からない。介護施設で手厚い介護・看護が受けられることに感謝している。

ところで、すでに団塊世代が現役を退き、2025年には後期高齢者になる。今後10年間、高齢世代人口が増え続ける。高齢者の医療と介護と財政負担をどうするのか。特に、地方の負担増をどうするのか。政府は、「地域包括システム」の構築で、地域の財政負担抑制を図ろうとしている。だが現段階では課題も多く、試行錯誤が続いている。

これから地方自治体に求められることは、自治体独自の医療・介護政策の企画・立案だ。地域住民が健康で長生き、幸せな老後を送るために、高齢者は国や地方に不満をぶつけるばかりではなく、地域の自立を図り・協力することも必要だ。公助、共助、自助のバランスを効率よく進めることが重要なのだ。

ずっと残っている三本のポッキーを子や孫やひ孫と一緒に食

べるその日を待っている高齢老人は幸せだ。ばあさんの小さな楽しみは生きる元気の源なのだ。

2015.3.16 今日の朝日歌壇から

面接で自分について語り終え案外私いいヤツなんだ

（長岡京市 深沢悦子） 選者：佐々木幸綱

選者評：ユーモアと味わいのある作。

⇒ひやひや、ドッキリの入試、入社試験。就職面接を終え、ああ、よくやったと自分で自分をほめたくなる。微笑ましい光景だ。よい結果を期待したい。

「初めて、自分で自分をほめたいと思います」。これは、1996年アトランタ五輪の女子マラソンで、3位にゴールした有森裕子さんがゴール直後の取材ゾーンで語った有名な言葉だ。

普通の人なら難なくできることが身体の障害のためできない。でも頑張って私なりにできた。出来は悪いが、普通の人ができることは曲りなりにでもやってみたい。何度経験したことか。

こんな時 I gave myself a pat on the back. I feel like giving myself a pat on the back. と言うようだが、私はすぐに思いつかないので、もっと簡単に I'm proud of myself. と自分に乾杯する。高齢者になれば、だれでも、自分について語れば案外いいヤツになる。

2015.3.29 今日の日経歌壇から

デパートのトイレの床の大理石ビーナスになる道もあったに

（仙台 岩沼啓二） 選者：穂村弘

選者評：「大理石」の運命における偶然性の怖ろしさ。転じて、人間の運命を思う。

⇒大理石にもいろいろ種類があり、デパートのトイレの床の敷石になった大理石が、ひょっとしてビーナス像になったかどうかは分からない。ロンドンの大英博物館、パリのルーヴル美術館、サンクトペテルブルクのエルミタージュ美術館に行ったことがあるのでミロのビーナス像は見たことがあるはずだが、情景が思い出せない。

調べてわかったことだが、大理石の彫刻で有名なミロのビーナス像は、現在パリのルーヴル美術館に展示されている。聡明な表情と女性らしいふくよかな輪郭を持つ裸体の美しさだけが印象に残っている。しかし、これは現物を見た印象ではなく、中学や高校の美術の教科書から得た知識だろう。大理石と言えば、エルミタージュ美術館の緩やかで広い階段の敷石にふんだんに使われていたことを思い出した。私の美術眼もこの程度だ。

ところで、評者はこの歌から、「大理石の運命における偶然性の怖ろしさ。転じて、人間の運命を思う」と言う。人はみな生まれいずるところを選ばず、長じてから死にいたるまで、多くの出来事を経験し死んでいくが、この間に偶然性や運命が支配した出来事であったと自覚できることは誰にでもある。

前の大戦の2か月前に、職業軍人であった父と同郷の母の下に生まれ、2歳半でポリオに罹病し、終戦を経て不自由ではあったが、小中学校、高校、関西学院大学を卒業し、税理士事務所を開業してもうすぐ後期高齢者になる私の人生も同じことだ。

毎日の生活で、人生の偶然性や運命を自覚することはないが、いつも、いつも私の周りの「良き理解者」に助けられ生きてきたことと、その人たちのおかげで幸せな人生を送ることができたと感謝している。

デパートのトイレの敷石でもなく、大理石のビーナス像にも

なれなかった普通の人生で、強運を感じることもなく、何をしても中位で、第2志望の多かった人生だが、私は、いつも、いつも同じことを言ってきた。「心晴れた時は『人生夢浪漫』失意の時は、『乗り越えられない試練はない』」これは私の生きる指針です。

普通の人生が一番。偶然の幸せも強運も、神さまの采配の下にある。

2015.4.19 今日の日経歌壇から

苦勞して35年の家ローン終えてかつ井妻と食べおり

(沼津 岩城英雄) 選者：三枝昂之

選者評：長年の重荷から解放された安堵感をおかつ井に結びつけたところがよい。鰻重や上寿司では奮発しすぎるし卵井では慎ましすぎる。市井のささやかな自祝にはやはりかつ井と思わせる。

⇒昭和36年に関西学院大学に入学した。当時、生協が経営する学生食堂の定食は、A定食が80円、B定食が70円、C定食が60円であった。もう一棟、業者食堂があり、ここの一番豪華なメニューは100円の「かつ井」であった。これより高いメニューはない。

昼食は大抵、生協食堂の定食や「うどん」で済ませていたが、たまに、「かつ井」を食べる。これは本当に美味かった。学生食堂の絶品メニューだった。残念なことに、私の卒業後に火災を起こし、今はない。

研修か視察で関学に来られた母校の社高校の赤阪右逸校長先生と食堂でばったりお会いした。「西村君、関学生は豪華な昼めしやなあ」と声を掛けられた。これには、おどろいたが、校長

先生は「うどん定食」、私は「かつ丼」だった。当時、外で食べる昼飯は、ほとんどの場合、「うどん」か「親子丼」の時代であった。

大学1～2年の頃は、民間の学生寮「上ヶ原荘」に下宿していた。ここの食堂には「ご飯」だけのメニューがあり30円であった。副食を付けると60円～70円になる。大家さんが、三田市の農家の方で、キャベツの漬物だけは食べ放題。従って、お金の困ったときは、ご飯だけ注文し、キャベツの漬物ですませる。懐かしい思い出だ。

当時、バナナやリンゴがまだ高価な果物であった。下宿が近くで、生涯付き合うこととなった宮内敏雄君は、ときどき、昼食や夕食を抜いて、バナナやリンゴだけを食べていた。私にはこんな選択は思いつかなかったが、余程果物が食べたかったに違いない。リンゴは硬い青森の「国光」だった。鰻重や上寿司が自分のオカネで自由に食べられるようになったのはずっと後のことだ。

ところで、苦勞して35年の家ローンを終えて、妻とかつ丼を食べている岩城さん。いやあ、本当におめでとう。大学を卒業して、就職、子どもが小さい間に「35年ローン」を組んでマイホームを建て、子どもの教育費や結婚などにオカネがかかり、ローンの繰り上げ返済はできなかったが、ようやくローン完済の日を迎えた。学生食堂のかつ丼を思い出しながら「よくがんばったなあ」と奥さんに話しかけているに違いない。市井のささやかな自祝にはやはりかつ丼だ。普通の幸せが一番。今後とも、病氣しないで2人で頑張ってもらいたい。

2015.4.29 叙勲受賞・感謝

29日付発令による「平成27年、春の叙勲」において、はからずも「旭日双光章」の受章拝受の榮に浴しました。これもひとえに皆さま方の多年に亘る温かいご指導ご支援の賜物と厚くお礼申し上げます。

私は、関西学院大学・同大学院において、恩師青木倫太郎先生とそのお弟子さんの先生方から「会計学」「管理会計」「監査論」「原価計算論」「税務会計」などのお教えを受け、郷里の滝野町で税理士・行政書士事務所を開業して今日に至っています。

今回、受章の対象となった地方自治体の代表監査委員をはじめ、社会福祉協議会の監事、地域農協の員外監事などを務めました。

このたび、旧滝野町ならびに加東市の代表監査委員28年の働きが公共への功勞として認められ、叙勲の榮に浴しましたことを大変うれしく思います。

もちろん、これらの仕事は私ひとりで出来たことではなく、皆さま方のご理解とご協力があってできたことであり、ともにこの仕事に従事した方々に心から感謝申し上げます。

今後は健康に留意し、この榮譽に恥じることのないよう一層精進したいと存じますので、相変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

2015.4.30 旭日双光章受章のお祝い

新聞報道のあった昨日に引き続き、今日も大勢の方から、叙勲のお祝いの品やらお花、祝電、電話やメールなどいただき、心から感謝いたします。

その中で、最近、長く出会っていなかった中学校の同級生の女

性から、昨夕、突然、電話があり「わたしは本当に嬉しい。勝彦さん（勝彦ちゃんと言いくかったに違いない）が勲章をもらえる。本当によかったね」とまるでわがことのようによこんでくれている。小さい時からの私の不自由をみんな知っている。

卒業後も、私の仕事をいつも心の中で応援してくれていたそう。上手な話しぶりではないが「今日は本当におめでとう。私はうれしい」と涙を流さんばかりに喜んでいる。「ありがとうね。私もうれしい」。あなたの電話は最高のお褒めの言葉だったよ。

また、施設でお世話になっている認知症の96歳の母親に、「今日の神戸新聞をお母さんに読み聞かせてあげました」と職員さんから添付メールを送っていただいた。認知症になるまでに報告してやりたかった。仏前にて父にも報告したのはもちろんである。私はうれしい。

2015.5.8 平成27年春の勲章伝達式

本日10時30分から、兵庫県公館3階第1会議室において、平成27年春の総務省・厚生労働省関係勲章伝達式が行われた。

式は、1)開式 2)勲記 勲章の伝達（総務省関係・厚生労働省関係） 3)知事挨拶 4)閉式 5)記念撮影の順で行われた。

出席者は、受章者21名と配偶者17名、付添人2名。総務省関係では、元市議会議員、元市長、元県防災監、元県部長、元県民局長、元町議会議員、元市代表監査委員、元町長、元町助役、元町公平委員会委員長でした。27年春叙勲 宮中拝謁は、5月13日、兵庫県の拝謁者数は38名。

私は、滝野町代表監査委員、加東市代表監査委員の仕事が認

められ、旭日双光章拝受の栄に浴した。今日は、井戸知事から心温まるねぎらいのお言葉を賜った。これもひとえに皆さま方の多年に亘る温かいご支援の賜物と厚く感謝申し上げます。今日は人生最高のよき日だった。早速、いただいてきた勲章、勲記を父の霊前に報告いたしました。

本日、身体の不自由な私をいろいろとお世話いただいた加東市の方々に心からお礼申し上げます。拝謁関係者の皆さまにご迷惑をおかけしないように留意し、皇居での天皇拝謁にも行ってきます。こんなうれしいことはない。

2015.5.15 叙勲と天皇拝謁

加東市の担当者から叙勲がいただけるかもしれませんが知らされたのは、昨年の秋、加東市代表監査委員を任期満了退任後、数か月経ったころでした。ただ、「ご推薦申し上げても叙勲があるとも限りません」とも聞いていた。

今年に入って、3月の確定申告が終わった後、兵庫県の栄典担当から、電話で内示があり、拝謁の1か月前になって、ネットや電話でホテルの予約、加古川線野村駅の緑の窓口で新幹線のチケットの前売り券購入など上京準備を行なった。

4月17日の閣議において、27年春の叙勲の受章者が決定された。新聞発表は4月29日。叙勲は、功績の内容に着目し、顕著な功績を挙げた者に授与させる旭日章903人、公務等に長年にわたり従事し、成績を上げた者に与えられる瑞宝章3,183人、計4,086人（外国人は除く）。いずれも内閣の助言と承認に基づいて天皇陛下から授与される。

伝達式は、省庁ごとに行われ、総務省関係は、各県知事から伝達が行われた。私の場合、5月8日、兵庫県公館において、井

戸知事から、勲記と勲章をいただいた。

5月12日、家内とともに加古川駅北口まで送っていただき、山陽線で新大阪まで、そこで介助者の次女と合流、新幹線「のぞみ」で東京駅まで行った。当日は、強い台風6号の接近で天候が心配されたが、加古川から東京まで、台風的一步先に行くこととなり、ほとんど雨に遭わなかった。13日と14日は、東京は朝から快晴、大阪に帰るころには曇り、それでもほとんど雨に遭うことはなかった。

天皇拝謁は5月13日、皇居の豊明殿で行われた。朝から、家内はセット、メイク、着付けなど。その後2人で記念写真撮影など終え、タクシーで都道府県会館に集合、バスで皇居に行った。皇居へは坂下門から入り、オバマ大統領が来日された時、宮中晩さん会が行われた「豊明殿」で天皇拝謁、陛下からお言葉を賜った。私は、車いすを利用していたので、介助者の次女とともに、別の入り口からエレベータで豊明殿に入り、最前列横の前から3番目に車いすのまま座っていた。

天皇陛下は、私の前で立ち止まれ「いかがですか」「どうですか」「お体を大切に」「お元気でね」のお言葉をいただき、「ありがとうございます」「幸せです」と申し上げた。突然のことで、感激してそれ以上の言葉は出なかった。

後は、皇居北だまりで記念撮影を行い、乾門を通り3時ごろに都道府県会館を経て、「ホテルニューオータニ・ザ・メイン」に戻った。その後、次女と二人で、東京駅ギャラリーでピカソ展を見て、八重洲口一番街で東京のお土産を買った。

14日、地元の藤井比早之代議士の野口秘書のご案内で、10時20分から自民党本部、続いて、新しい総理大臣官邸と議員会館を見学した。議員会館で、藤井代議士とともに昼食をいただき

本会議が始まる直前まで懇談をした。

自民党本部では、総裁の机に座って写真撮影、総理大臣官邸では、定例会見の行われる記者会見室の机の前に写真撮影をした。家内も次女も大変喜んでいて。

午後2時発の新幹線、山陽線に乗り、加古川駅に到着、長女らが迎えに来てくれ、7時に無事帰宅した。大勢の方々のお世話になり、よい経験ができ、人生最高の喜びであった。

2015.6.7 今日の日経歌壇から

肩書きも燃えてしまえばただの灰骨壺の中 音すら立てず

(さいたま 玄井 冬) 選者：三枝昂之 選者評：なし

⇒先日、母を亡くした。生涯を通じて、主婦業以外に何の肩書きもない普通の女の一生だった。母は、大正8年2月、父三郎と同じ加東市上滝野で生まれ、昭和14年、当時、陸軍軍人であった父と結婚、父が津の33連隊勤務の職業軍人であったため、三重県一志郡久居町で、戦前、戦中を暮らし、戦後は郷里の滝野に帰ってきた。

昭和19年の夏に小児麻痺（ポリオ）に罹病した長男の私を抱え、戦中戦後の生きにくい時代に、1男3女を産み育てた。自分の子どもを育てたことはもちろん、内孫3人、外孫6人の生活にも深くかわり、特に内孫3人の世話は、小さい時はもちろん、大学入学から卒業、就職後まで何かと世話をした。ひ孫は18人になる。

父三郎が、昭和59年に急性心筋梗塞で亡くなってからの30年余は病気で寝込むこともなく、息災でよい生涯を過ごした。87歳ごろから近隣の介護施設のデイサービスでお世話になっていた。

90歳を過ぎた頃から認知症になり、お世話になっている介護施設で、社高女の校歌を一つ語りのように何回も披露するので、介護士さんたちが歌詞を覚えて母の歌唱をリードしていた。「えらいおかん」だった。

最期は、体重30キロ弱になったが、胃瘻や経管栄養に頼ることなく去る5月28日、子ども夫婦に見守られ、老衰により静かに息を引き取った。享年97。先日、皆さまのおかげで立派な葬儀をしていただき、今は忌中の法事を行っている。

伊藤榮樹^{いとうしげき}さんは、東京高検検事長・法務事務次官・検事総長を務め、巨悪と闘い「ミスター検察」と呼ばれた人だ。この人が「人は死ねばゴミになる」という題名の本を書いた。伊藤さんは、助かる見込みのない病に冒されながら、それに動揺せず、死ぬまで冷静さを貫いた。この本は私も読んだ。本の題名だけが一人歩きしているようなところもあるが、人の死後を考えるよい本だ。ただ私は（敬虔な仏教徒ではないが）「人は死ねばゴミになる」とは考えない。

「肩書きも燃えてしまえばただの灰」「骨壺の中音すら立てず」という表層的理解は、私には受け入れがたい。死者が後世に伝うことは多い。たとえ「主婦業」以外の何の肩書を持たなかった母でも「死ねば仏になる」。十分なことはしてやれないが、しっかり仏まつりをしてやりたい。長い間の感謝をこめて「ありがとう」「あなたはえらいおかんだった」。

2015.7.6 日経歌壇から 日経6/5

近況を語る場となりぬ四十九日の法要の席

（湖西 菅沼貞夫） 選者：三枝昂之 選者評：なし

⇒亡くなった日を入れて、7日ごとに連夜と称する法要を行

い、49日後の法要を忌明けするのが四十九日。忌明けが3か月に渡らないように35日で繰り上げる場合がある。これを三十五日の法要という。

先日、母の三十五日の法要を営み、多くの近親者にお参りいただいた。よくよく見ると、近年これだけの親戚縁者が集まったことはない。亡くなった母やその配偶者の兄弟姉妹とその子どもと孫が万難を排して集まってきている。

近隣に住む者ばかりではなく、長じてからの大学、就職、結婚などで都市部に住み、家族を持ち、居を構えている者も多い。日本国中で起こっていることだ。さらに、今日集まってきた子どもやその配偶者らは、次回からは来なくなる。つまり、葬儀や忌明けの法要の席は、最高の人数の親戚関係者が久しぶりに集まる社交場なのだ。

私の母は96歳まで生き、老衰でなくなったのだから、悲壮感はない。喪主は母の思い出を語っているが、ほかの関係者は、みんなお互いの近況を語っている。どこにでもある普通の光景だが、短歌に詠まれると「そうなんだ」と感慨深い。

「忌明けの家族揃って笑おわる」（きちあけのかぞくそろいてわらいおわる）加東市 丸山一之

2015.7.13 日経歌壇から 日経7/12

バイパスに店も車も奪はれてむかし昔に戻る旧道

（志木 飯村 哲） 選者：三枝昂之 選者評：なし

⇒地方都市ならどこにでもある普通の風景だ。店もなくなり、車も通らなくなったばかりでない。住宅街なら、空き家が増えたばかりか、家屋を壊した跡地に小さな駐車場が並んでいる。

残っている家屋は老夫婦のみ。子どもがいて孫が住んでいる

家屋は少ない。商店街なら、美しくカラー舗装された街路に普通の町家が並んでいる。人口減少、高齢化の現実がここにある。このままでは旧道筋は故郷の廃家のかたまりになる可能性がある。

なぜ、こんなことになってしまったのか。理由はいろいろだが、根源的な理由は、若者の雇用機会がないことだろう。私の住むまちは、外国人労働者の人口流入があるので人口は減少していないが、もともとの土地の子どもは都会暮らしが多い。外国人労働者の滞在マンションは増えたが、町家は増えていない。

ずいぶん昔から、若い男女が地元でいたのは高校まで、その後は都会暮らし、結婚後も都会暮らしで地方に帰ってくるのはお盆と正月くらい。定年退職後も都会暮らしが続く。理由は、子どもの配偶者も孫も都会の人。私の地方出身の大学同級生のほとんどの生活実態だ。

田舎をダメにしたもう一つの理由は農業の衰退だ。農地は守らなければならない農家伝来の財産ではなくなった。子どもは誰も儲からない農業に振り向かない。仕方がないから老夫婦は、専業農家に耕作委託する。ところが、農用地利用導入促進法などに守られた小作権の付かない使用貸借ばかりだ。これでは固定資産税ばかりか、農会費や出不足金と称する金員が必要になる。それでは、手放せばよいのだが、なぜ、こんなにも思う位安い。

最近、自宅近辺に空き地の「売り土地」が増えた。なぜ、もっと早く売り出さなかったのか。買い手がなくなった土地が長い間、放置されている。これはある特定地域の事情でもないようだ。

人口動態を考えずして、地方創生は難しい。できてしまった

大都会と大企業だけが繁栄する世の中の仕組みを根本的に変えないと、このままでは「旧道筋がむかし昔に戻ること」さえ難しい。

子どもが地元にいる高校生までの時代に、地方都市に雇用機会があることを教え、農業を活性化して、若者に地元で結婚し、子育てができる希望を与えるための環境づくりに「長期的地方創生策」を考慮すべきときだ。そのために、人口減少への有効な対策、処方箋に、雇用機会の創出、農業活性化などの個別、具体、詳細な長期的計画立案が望まれる。

2015.7.20 今日の朝日歌壇から

戦場へ昭和生まれは送るひと平成生まれは送られるひと

(半田市 依田良雄) 選者：高野公彦

選者評：戦争を始めるのは昭和生まれの人、そして戦場へ送り込まれるのは平成生まれの人。

⇒多くの国民に疑問を残したまま安全保障関連法案が15日の衆院特別委員会で可決された。自衛隊が海外で戦闘行為に関わる可能性を含む法案の委員会審議は与党単独採決で幕切れに(日経)。批判の多い法案が衆議院で可決され、論戦は参議院に移る。国民の意見をよく聞き徹底審議を期待したい。

文藝春秋8月号で、ジャーナリストの船橋洋一氏が「太平洋戦争の肉声」(文藝春秋社刊)から「日本型リーダーの致命的な欠陥」について寄稿している。結論を先に述べれば、「日本はなぜ、あのような戦争を始め、あのようにしか終わらせることができなかったのか」。

この疑問に凝縮した形で答えようとするならば、リーダーシップが足りなかったからである、としか言いようがない。リス

クに正面から取り組みガバナンスを効かし、全体を見て、全体を動かすにはリーダーシップが欠かせない。

そして、危機において、リーダーシップは往々にして勇気と同義語になる。恐らく戦前の政治リーダーシップにおいて最も欠けていたのは、この勇気だったろう。

長い引用になるが、もう1か所引用する。「昭和天皇は『昭和天皇独白録』の中で、陸海軍の不一致を敗戦の四大原因の一つに挙げている。天皇、陸軍、海軍の三者の不一致は、この時期の日本の最大のガバナンスの欠陥だった」。

寄稿文は、1.満州事変（単細胞の一撃論） 2.ガダルカナル（戦力を逐次投入する愚） 3.インパール（最悪の「シナリオ」なき作戦） 4.サイパン（「縦割り組織」の自滅） 5.レイテと特攻（精神主義の空虚さ） 6.沖縄戦（総花作戦の悲劇）について詳述している。

半藤一利の『昭和史』ほか、多くの著書で語られてきたことばかりだが、全くその通りだと同意できる内容だ。

私の父は、満州事変後の昭和8年からソ満国境の守りにつくこと2回、長春、ハルビン、チチハルなど酷寒の地で過ごし、その後、再び日中戦争に従軍、負傷して帰国するまで外地勤務、帰国後は、終戦まで職業軍人として津の33連隊に勤務した。母屋の2階の書庫には多くの昭和戦記が保存されているが、父が私たち子どもに戦争を語ることは全くなかった。職業軍人と結婚しその妻となった母は「戦争は絶対にしたらいかん」と口癖のように言っていた。

「戦争は始めたらいかんのだ。一たん始めた戦争は誰も止められないからだ」。船橋さんは言っている「真摯に歴史に向きあい、検証し、教訓を学び続ける『反省力』が求められている」。これ

が安保法制論議の原点だ。

2015.7.27 教育学部、教員養成特化へ 今日の日経から

国立大学の教育学部が曲がり角に立っている。国の大学改革により教員養成を目的としない学科・課程を原則廃止するなど抜本的な改革が求められているためだ。18歳人口が減り学生の獲得競争が激しくなる中で、大学側はニーズの強い分野での教員養成に特化するなど他大学との違いをアピールしようとしている。

⇒各大学の対応は以下の通り。

・東京学芸大学は4月、大学卒業に教員免許の取得を必要としない芸術スポーツ文化課程など5課程を教育支援課程に改組。そのうえで定員は335人から185人へ大幅に減らした。

・香川大学と和歌山大学は4月、教員養成課程以外の学科・課程の定員を減員し今後は廃止を検討する。高知大学と山口大学は教員養成課程以外の募集をやめた。教員養成に専念という国の要請は浸透しつつあるようだ。

・東京学芸大学は廃止でなく、支援人材育成という形で教員養成課程以外の学科を残した。伝統ある教育大学として幅広く教育に役立つ人材を輩出したいという思いがある。藤井健志副学長は「国の了解を得るのは大変だったが、18歳人口が減れば教員養成だけでは生き残れない」と打ち明ける。

・文部科学省は2013年から国立大学に教員養成課程以外の学科の原則廃止を含めた見直しを求めた。今年目立つ組織再編はこの影響だ。

⇒大学改革については、本年3月時点では「文科省は教育学部の教員養成機能を充実させる一方で「国際化や地域のニーズ

に沿った教育を充実させる必要がある」(国立大学法人支援課)としていた。

これにより「福井大は16年以降に教育地域科学部を再編し国際地域学部(仮称)を設ける。横浜国立大は17年に実施する入試から教育人間科学部の人間文化課程の募集をやめ、街づくりを担う人材を育てる都市科学部(仮称)の新設を検討中だ」という報道があった(日経 2015/ 3/30)。

私は、加東市の兵庫教育大学の改革について「この大学に産業教育学部を創部して、教員志望以外の学生を受け入れ、北播磨の地方創生にはどうかと考える。地方の未来に大学を取り込むことは有益だ。考えてみたい視点だ」と意見を述べた。

加東市にとって兵庫教育大学の改革と存続、繁栄は多くの住民が期待している。改めて、兵教大のさらなる発展を期待したい。

2015.8.10 朝日歌壇から 朝日8/9

祖父さんが農地改革で取得せし田んぼに孫は雑草生やす

(三原市 岡田独圃) 選者：高野公彦 選者評：なし

⇒戦後占領下の農地改革で不在地主の全貸付地と、在村地主の貸付地の保有限度(都府県で平均一町歩、北海道で四町歩)を超える部分を国家が買収し、小作農に売り渡し自作農化した。また、物納小作料を金納化するなどの改革が行われ、旧来の地主・小作制度は解体された。

多くの小作農が自作農となり、土地持ち農家となった。

当初厳格に運用された農地法は、ときどきの時代の変化や農業政策の変更により、法改正、農用地利用増進法、農振法、生産緑地法、その他法と引き続き、法の改正、制定が続いた。そ

の後、バブル時代の猛烈な開発行為により土地価格が高騰した。

北播磨地域でも多くの開発行為が行われた。有名なゴルフ場開発(山林開発)ばかりでなく、都市計画区域の土地の開発も行われ、このとき土地を手放した(山持ちや)農家はにわか成金となり、娘さんの嫁入りごしらえに何百万円もの着物を作り、豪華な嫁入り道具を持たせた。もちろん、農家は立派な御殿に建て替わった。近くでは淡路島を始め、全国各地でみられたすごい光景だ。このように、一部の小作農が自作農となり、後に大資産家となったケースは多い。当時、農地転用・開発行為、さらに譲渡することは、農家の夢であった。

しかし、農地を農地として守ってきた多くの農家はいまや後継者もなく「祖父さんが農地改革で取得せし田んぼに孫は雑草生やす」結果となり、田んぼを持ちあぐねている。農地所有を巡って、人間の運、不運、回り合わせに驚く。

2015.9.6 きょうの日経歌壇から

国旗掲揚の中間点のめやすなり「さざれ石の～」と歌うところが (名古屋 清水良郎) 選者：穂村弘 選者評：なし

⇒平成17年7月から小野ロータリークラブの会場監督・SAAという役職を努めた。この役職は、クラブ例会の管理者として最高の権限を持っている役職であり、例会の司会、進行はもちろん、開門、閉門、私語の取り締まり、会場の秩序維持等まるで武装した下士官(Sergeant at arms)のような役目だ。

その時に、ロータリーの重要な会合で掲揚される国旗「日の丸」と斉唱される国歌「君が代」について所感を書いている。

・国旗「日の丸」について

日本の国旗は、四方を海に囲まれた日本列島において最も慣

れ親しまれた日の出の景色をデザインしたと思われませんが、「日の丸」は、国旗としての歴史は思いのほか新しい。

「日の丸」は、日本人が古くから太陽をうやまう気持ちを持ち続けてきたことに由来すると言われていています。日本の神話では、大和朝廷の祖先の神としてもっとも重要視されるのが太陽神として仰がれる天照大神でありますし、遣隋使が持参した外交文書には、我が国のことは「日いずるところ」と表現しています。また、国の名前そのものが太陽にちなむ「日本」と定められています。

白地に赤の丸を描いた日の丸の旗は、中世から近世初頭の合戦などに多く用いられていましたが、江戸時代に入り、日本人に海外渡航が禁止されると、「日の丸」は、江戸幕府専用の船印とみなされるようになりました。

そこで、薩摩藩第28代藩主 島津斉彬は、幕府に大型の蒸気船建造申請を行った際、日本船の総印として白い帆に朱の日の丸を使用し、さらに「日の丸」を日本全体の船印とする旨を幕府に進言、幕府もその必要性を認めたと言われていています（1854年・安政元年）。

徳川幕府の滅亡と近代国家建設までの間に行われた戊申戦争の時には、官軍は錦の御旗と日の丸を使用しましたし、幕府軍の海軍、彰義隊、白虎隊、さらに五稜郭の榎本武揚らも日の丸を使いました。いずれも権力の象徴として「日の丸」を使っていますが随分混乱しています。

そこで、1870（明治3）年1月27日太政官布告第57号で、我が国の商船は日章旗「日の丸」を国旗としてかかげることとし、別に「御国旗の寸法について」を交付しました。引き続き、1872（明治5）年11月24日、「天長節・紀元節」など、天皇制と国家

神道の祭典であった祝祭日に、また海港場では常時国旗を揚げる事が通達されました。

「日の丸」はその後の戦争において、天皇の権力と戦意高揚のシンボルとして利用されましたが、戦後の平和憲法のもとで、ようやく最近になって1999（平成11）年国旗国歌法が成立し、長年の慣習が法律に明文化されました。

国旗は、特定の国を他の国と区別する印であるとともに、その国の主権を表す神聖なシンボルとして尊重されなければなりません。

・国歌「君が代」について

社税務署の署長室に「さざれ石」の標本が飾られています。学名は石灰質角礫岩という。石灰岩が長い年月のうちに雨水に溶解し、時には乳液状となって大粒な石、小粒な石を次々と集結して自然に大きな巖いわおとなったもので大変おめでたい石とされているそうです。「さざれ石」というおめでたい石があることをご存じでしょうか。

ところで、君が代の元歌は、10世紀の初め、醍醐天皇の命令で紀貫之らが編集した勅撰和歌集「古今和歌集」巻七 賀歌のトップにある読み人知らずの「わが君は千代に八千代に さざれ石のいわほとなりて 苔のむすまで」であります。

現在語に訳せば、「わが君のお年は千代、八千代にまで続いていたきたい。一握りの小石が少しずつ大きくなり、それに苔がはえるまで」となるでしょう。

新しい歴史教科書市販本（中学社会）では、「私の敬愛するあなたさま、どうか千年も万年も、小石が寄り集まって大きな岩となりそれに苔が生えるほど末永くお健やかに」となっています。やさしくてよい解釈です。

余り難しく考えなければ意味はすんなり理解できますが、ここで、わが君を天皇を指すと狭く解釈すると話は難しくなります。戦前の現代語訳は「わが天皇陛下のお治めになるこの御代は千年も万年も、いや、いつまでも続いてお栄えになるように（戦前の国定教科書）」ということでした。

新しい歴史教科書では「国歌君が代の君は、日本国憲法のもとでは、日本国及び国民統合の象徴と定められる天皇を指し、この国歌は、天皇に象徴される我が国の末永い繁栄と平和を祈念したものと解されている」と説明されています。この説明で中学生が理解出来るのかどうかは分かりませんが、私たち大人には、分かりやすい説明です。

しかし、この歌曲と歌詞がまるで合っていない。北播磨地方では、多くの人は「君が代」ではなく、「君があようは一」と歌い出し、「千代に八千代にさだれ」で切って、「石の巖となりて」「苔のむうすうまあぜ」と無理にひきのばして歌います。これでは何のことだかさっぱり分からない。

意味を考えれば、「君が代は一」で歌い出し、「千代に八千代にさだれ石の」と長くのばしてここで切り、息を継いで、「巖となりて苔のむすまで」と歌わなければなりません。これは難しい。要するに音楽的には余りよくないのです。

国歌「君が代」の中間点は「さざれ石の～」であって「さだれ石～ではないのです。

2015.9.12 叙勲祝賀会ご挨拶

このたび、山本元加東市長らのお世話で「西村勝彦・叙勲受章祝賀会」を開いていただきましたところ、このように大勢のご出席をいただき、心からお礼申し上げます。

山本廣一元加東市長、土肥芳郎関西学院大学同窓会小野加東支部長、吉村進吾加東市社協会長、藤井悦治元加東市商工会長の4人の発起人のみなさま、名前は出していませんが、事務局を務めていただいた山田さん、臼井さん、西山さんに心から感謝申し上げます。

本日、ご来賓としてお越しいただきました安田加東市長様、藤井比早之衆議院議員様、藤本百男兵庫県会議員様には、ただいまは、身に余るご祝辞を頂きありがとうございます。心から感謝申し上げます。

このたび、滝野町並びに加東市代表監査委員の功績により旭日双光章叙勲という「生涯で一番のご褒美」をいただき、このように盛大に叙勲祝賀会を開催していただきましたことは、私にとって人生最高の喜びでございます。

ところで、私が古希を迎えた機会に今までの人生を振り返り、過去の体験を書き残し「人生夢浪漫・ある税理士の履歴書」と題する自著を上梓し、本の帯には「乗り越えられない試練はない」などと書いたのは、本当は恥ずかしいのですが、ただ、ひとつ説明いたしますと、これらは今に始まったことではなく、40年余りの年月をかけて実践し、古くは「新東播紙」その後は所属した団体の機関紙などに寄稿したことばかりです。

今日は皆さまとともに「人生夢浪漫」について楽しく語り合いましょと発起人さんが呼びかけてくださいました。

最初に、自著の「はじめに」の部分を朗読させていただきます。

心晴れたときは「人生夢浪漫」失意の時は「乗り越えられない試練はない」これは、私の生きる指針です。これまでの人生を、何時もいつも、多くの周りの人々に助けられて生きてきま

した。

周りの人々の第1は家族です。第2は、先輩や友人、多くの団体、仕事の関係者です。若い時から、青年会議所、ロータリークラブに入っていたこと、子どもの成長に合わせてPTA活動をしたこと、税理士会や行政書士会、市町の公職、農協の仕事などを引き受けたことに多くの方々のご理解を得ました。

前の大戦の2か月前に、職業軍人であった父と同郷の母の下に生まれ、2歳半でポリオに罹病し、終戦を経て、不自由ではありませんでしたが、小中学校、高校、関西学院大学を卒業し、税理士事務所を開業してもうすぐ後期高齢者になります。これまでの人生を、いつも、いつも私の周りの「良き理解者」に助けられ生きてきたこと。その方たちのおかげで幸せな人生を送ることができたことに感謝しています。

今後とも、皆さま方のご芳情に報いるため、健康に留意し、頑張る所存でございます。皆さまには相変わらぬご指導とご厚誼のほどをお願い申し上げます、私のお礼のことばとさせていただきます。本日は本当にありがとうございました。

2015.9.14 乗り越えられない試練

先日の叙勲祝賀会において、出席者の一人から「人生夢浪漫」を一読しましたが、「人生夢浪漫」について具体的な記述が少ないと思う。もう一つは本の帯にかいてある「乗り越えられない試練はない」これはどういうことでしょうかという質問がありました。

その時、私は一瞬驚きましたが、「人生夢浪漫」については、あちこちの団体や会合でお話ししました。青年会議所創立15周年の理事長として15周年のテーマを「行動で示そう青年の夢と

ロマン」と決め、記念事業として青野ヶ原の灌木林で（小学生250人、会員50名による）「小野加東大キャンプ」大会を行い、キャンプのテーマは「青少年に夢と感動の機会を」であったことなどをご紹介してご理解を得ました。

「乗り越えられない試練はない」。このことについては、私は「これは傲慢ではないだろうか」と考えることがあります。実は、今日の最初のご挨拶でもこのことについて述べることを考えておりました。しかし、それを述べませんでした。乗り越えられない試練、たとえば、不慮の事故、病気など失意の時には「乗り越えられない試練はない」と自分に信じ込ませ頑張ることで、そうすればよい結果が得られる。「頑張るのも、よい結果を得るのも自分だと信じることだ」と考えました。

私自身、65歳を過ぎた頃から、何度か大病をし、今なお治療中ですが、「乗り越えられない試練はないと自分に信じ込ませ、よい結果を信じて頑張っています」と申し上げました。

私の心にぐさりと刺さるよい質問でした。ありがとうございます。

傍白

「乗り越えられない試練はない」。これは私の造語です。聖書には次のように書かれています。

「あなた方を襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはず。神は真実な方です。あなた方を耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道も備えていてくださいます」（コリント人への手紙第一第10章13節「新共同訳聖書」）。

2015.10.4 国立大、地域学部 今日の朝日新聞から

地方の国立大学に「地域」を冠した学部が次々と誕生する。今春の高知大をはじめ、来春には宇都宮大、福井大、佐賀大、宮崎大で新設される。少子高齢化や地場産業の衰退などが深刻化する中、地域課題の解決に役立つ人材育成をめざす。

・高知県の仁淀川町長者地区。山肌に広がる美しい棚田で5月下旬、大学生17人が地元の農家とともに田植えをしていた。4月に高知大に新設された地域協働学部の実習だ。前期はキャンプ場の草刈りやお祭りの手伝いにも取り組んだ。

・佐賀大の新学部は、地元のブランドである「有田焼」をはじめとする陶磁器産業を支える教育研究の一翼を担う。マネジメントも学び、販路開拓を担える人材も育てる。県内在住の人間国宝の陶芸家らも非常勤講師となる予定。

・鳥取大では地域学部が中心になって、学生が過疎集落で高齢者からかつての農作業や暮らしぶりを聞き取って冊子にまとめたり、鳥取市の中心市街地にある廃業した病院の建物を現代アートの展示会を開く文化拠点に再生したりしてきた。

・地方の国立大は、18歳人口の減少に直面。さらに文系学部は、社会に役立つ実学重視へ転換を迫られている。地域学部の創設には、特色ある学部の新設で生き残りをはかる狙いもあり、今後、広がる可能性がある。

⇒私は「教育学部、教員養成特化へ変身」において、加東市の兵教大の改革について「この大学に『産業教育学部』を創部して、教員志望以外の学生（教員免許状授与にこだわらない）を受け入れ、北播磨の地方創生にしてはどうかと考える。地方の未来に大学を取り込むことは有益だ」と意見を述べた（7/27、11/25）。

引き続き「現状では、私の提案は全く空振りのようだが、「地方の国立大学は、外国人留学生の受け入れと職業人教育だけをやればよい」とでもいう意見には、強い違和感を覚える。地域との親和性を維持し、さらに発展するための兵庫教育大の大学改革が成功することを期待している」と意見を述べ、「加東市にとって兵庫教育大の改革と存続、繁栄は多くの住民が期待している。改めて兵教大のさらなる発展を期待したい」と3回にわたり意見を述べたが、大学からも、マスコミからも、行政からも評価されることはなかった。

今日の朝日新聞によると「地域」を冠した学部が続々誕生した明細は以下のとおり。

大学、学部、設置年度、主なテーマの順に記載

宇都宮大 地域デザイン科学 2016 交通弱者などの高齢化問題

福井大 国際地域 2016 地場産業の振興とグローバル化

佐賀大 芸術地域デザイン 2016 有田焼など陶磁器産業の人材育成

宮崎大 地域資源創成 2016 畜産、農業、観光の活性化

高知大 地域協働 2015 過疎化が進む中山間地域の振興

山形大 地域教育文化 2005 地域と連携した教員養成

鳥取大 地域 2004 地域の文化や遺産の継承

岐阜大 地域科学 1996 町おこしやコミュニティー再生

⇒ここまで読んで、私の提案が奇想天外でも突飛でもない提案であったことに自信を深めている。

※兵庫教育大学には「教員養成大学」としての使命と縛りがあるが、山形大学では「地域教育文化学部」が2005年に創部され、地域と連携した教員養成を行っている例が参考になる。

2015.11.8 今日の朝日歌壇から

「ひとり」って時間を好むようになる社会人とはこういうことか
(筑後市 近藤史紀) 選者：馬場あき子
選者評：社会人となった作者。「ひとり」の時間がしみじみ響く。

⇒私が「ひとり」の時間をしみじみ感じたのは関西学院大学に入学して西宮市上ヶ原で下宿生活を始めたときだ。大学生ばかりが30名もいる民間の学生寮であった。夕食の時間が過ぎ、食堂から4畳半の自分の部屋に戻り、翌朝まで静寂の時間をひとり過ごしたことを思い出す。

その後、この学生寮から食堂のない民間下宿に変わり、食事は自炊か、大学の食堂を利用した。夏休みになり、自宅に帰ることを楽しみにしていた。私の下宿生活は6年間続いた。

社会人となって、大阪市北区の会計事務所に勤めるようになり、豊中市の阪急電車曾根駅前の文化住宅に移った。ここは完全な3食自炊だ。会計事務所勤務と経理学校の夜間コースの講師をしながら受験勉強を続けた。こんな生活が3年半続いた。われながらよく頑張ったと思う。

29歳になり郷里の加東市に戻り会計事務所を開業、両親とともに生活、引き続き結婚、3人の子どもに恵まれ幸せな生活を過ごした。私の周りに、いつも良き理解者がいた。

最近、体調不良で入退院を繰り返したが、「ひとり」の時間をしみじみ感じたのは病気入院も同じである。遅い朝食、治療、早い夕食の毎日の繰り返し、夜の消灯から朝の点灯までの時間の長いこと。病気療養による体調不良と不安、今日まで何回となく経験した。周りに大勢の人がいることはうれしいことだ。

2015.11.21 広岡浅子と播州小野藩 NHK朝ドラから

NHK朝ドラ「あさが来た」の原案本である「土佐堀川」(古川智映子著、新装改定版)を大同生命からいただいたので久しぶりに小説を読んだ。もちろん、朝ドラは毎日見ている。朝ドラでは、ヒロインのモデルとなった人物、広岡浅子の生涯がいよいよ佳境にはいる。

今日は広岡浅子と小野藩の繋がりについて述べる。これは原案本の最後から三章にある「不死鳥のように」に初めて出てくる。ドラマにはまだ出てこないが、浅子には広岡亀子という一人娘がいる。

浅子は、この一人娘に養子一柳恵三を迎える。恵三は東京帝大法科の出身の逸材、両替商加島屋広岡家が起こした加島銀行や大同生命の事業の後継者となった。

恵三は、小野藩最後の藩主、一柳末徳の二男である。小野藩は、加東郡を領し、江戸時代初期から廃藩置県まで長く治めた外様大名だ。

一柳藩最後の藩主、末徳には、もう一人聡明な人物がいる。建築家ヴォーリズと結婚した一柳満喜子だ。満喜子は、当時長きに渡ってアメリカに留学していた。聡明な女性であったに違いない。

以下、少し横道にそれるが、末徳は明治17年、華族令により子爵に叙せられていた。当時、三女の満喜子が、外国人ヴォーリズと結婚することが問題となった。これは、満喜子が華族から平民戸主となることによって宮内省の許可が下り解決した。ドラマには出てこないが、小野や加東では多くの人が知っている。

建築家ヴォーリズは、多くのキリスト教会や関西学院ランバス記念礼拝堂などの建築で知られるが、1990(平成2)年まで

土佐堀川・肥後橋にあった大同生命本社ビル（現在は吹田市江坂に移転）もヴォーリズ的设计による。浅子の円熟期のことだ。

広岡浅子が生きた江戸末期の嘉永年間から、大正にかけては日本経済の激動期であった。ドラマではこれからだ、浅子の功績は、加島炭鉱ばかりか、加島銀行の創立、綿花輸入の広岡商会、大同生命、尼崎紡績の創業などがある。

座右の銘は「九転び十起き」。最期は重症の乳がんに侵されるが、その生涯を不死鳥のごとく生きた。

浅子はまた実業の世界ばかりか、成瀬仁蔵に協力して日本女子大学の創立にもかかわり、初期の女子教育に貢献した。

今後ドラマがどのように展開するのかかわからないが、ますます面白くなってきた。

2015.11.29 今日の日経歌壇から

平積みの上から三冊目の本が今日も買われる旭屋書店

（東京 川良 傑） 選者：三枝昂之

選者評：三冊目近い選択をしている人も多いのでは。

⇒この歌の作者は東京の方だから、この歌に出てくる旭屋書店は、東京の店舗だろう。全国のどの書店も入口付近の一番よく目立つところに「平積みコーナーがあり、文学賞の受賞本や好評新刊本がうず高く積まれている。平積みの上から取って内容を見て、実際に買うのは汚れていない三冊目だということか。みんな同じことをしている。

私が、大学・大学院で勉強していた6年間、書店といえば、大阪の旭屋書店に行った。戦後すぐに産経新聞社長の早嶋喜一が大阪市北区梅田のJR大阪駅前創業し、その後、御堂筋東側の曾根崎に移転した。図書館のような大きい立派な書店であっ

た。経済や会計の専門書ばかりか、新刊書、小説などの背表紙を何時間も眺めて楽しんでた。阪急・甲東園から乗車、西宮北口で乗り換え、阪急・梅田駅から歩く。地下道でも行けるが、私は、JR駅前道路を横切り、第一生命ビルの裏側の店舗まで歩いた。友人と一緒にの時もあるが、大抵はひとりで行った。余り何回も行くので、店員さんが顔を覚えてくれて高い棚から本を取ってくれるようになった。椅子に座って立ち読みができる訳はなく、どのようにして立っていたのか。

郷里で会計事務所を開業してからは、阪急梅田駅隣接の紀伊國屋書店へ子ども連れて行った。中国自動車道から阪神高速・福島インターで降り、阪急梅田駅上の駐車場に車を置き、エレベーターで降りたところが書店の入り口だ。子どもには、集合場所と時間を約束して別れ、店内を自由に散策させた。日曜日の楽しみであり何回も何回も行った。

私の蔵書が1,000冊を超えたので、その中から800冊を選んで、滝野町図書館に寄贈した。大学の図書館の思い出より（苦勞して行った）、大阪の書店の思い出が強く印象に残っている。阪急・梅田駅から旭屋書店まで自分の足で歩いて行けたこと。大学卒業後は、自家用車で大阪まで行けるようになったことが私の行動範囲を拡大した。

古希を過ぎた頃から、体の不調で入退院を繰り返したが、もうすぐ、後期高齢者になる。若いころの旭屋書店や紀伊國屋書店の懐かしい思い出が蘇る。

2015.12.7 今日の朝日歌壇から

今日からは熱爛にするがん細胞お前も一緒に味わって飲め

（本庄市 福島光良） 選者：高野公彦

選者評：憎いがん細胞だが、自分の体の一部でもある、という意識。

⇒日本人の2人に1人ががんにかかり、3人に1人ががんで死亡している。従って、ある日、突然、誰ががんになっても不思議ではない。ただ、生涯、がん細胞におかされない人が2人に1人いる。3人に2人はがん以外の理由で死亡することを考えると「がん細胞は憎い」。

がんは、あらゆる病気のなかでも最も死亡率の高い病気で、日本人の死因第1位を占めている。また、がんが恐ろしいところは、初期にはほとんど自覚症状がないことだ。

69歳で前立腺がんになり、70歳で放射線治療を行った。その後、定期的にPSA値を測定し、毎年1回、PET検査で再発や転移を調べている。今日は、治療後4回目のPET検査を兵庫県立がんセンターで行った。うれしいことに前立腺がんの再発や転移ばかりか、新しい原発がんの兆候も全くなかったので安堵している。

ただ、がんに罹患した経験を持つ私に今後もこの状態が続く保証はどこにもないが「今日からは熱燗にするがん細胞お前も一緒に味わって飲め」という気にはなれない。前立腺以外の原発がんが何時、どこにできるか。それはまるで分からない。70歳を過ぎるとがんに罹るリスクは誰もが覚悟しておきたい。

2015.12.13 勲章と勲記

先日、大学の1年後輩の藤井征樹さんから、旭日双光章の勲記と勲章を見せてほしいと頼まれた。「妙なものを見たい人がいるのだ」と思ったが、これは口実で、本当は久しぶりに歓談しようということであった。

自宅に来ていただき、客間に掛けている勲記と勲章をみながら、皇居参内の様子や、学生時代のことなど歓談した。

私は自分の旭日双光章の勲記、勲章の左に父の「勲六等瑞宝章」の勲記を掛けている。彼曰く「この勲章はどうしたのですか」と。

確かに勲章がないのは不自然だ。どこかにあるはずだ。父が亡くなって来年で33年、母も本年5月に亡くなっているので、自分で探すより仕方がない。

父の褒章の対象は陸軍軍人だから瑞宝章は理解できるが、戦中の叙勲には勲記だけで、勲章はないのかも知れないと思いつつ、3時間、父の遺品の本棚を探したところ、勲七等瑞宝章と勲六等瑞宝章の勲章が無造作に保管されていた。満州国建国褒章という勲章まであった。

生前に父から戦争の話はもちろん、勲章のことなど聞いたことがない。ただ、天皇陛下からいただいたという輪島塗の菊のご紋章入りの木杯だけは毎正月のお祝いに使っていた。

今日は藤井さんのことばから、父の勲章を探すことになり、父のことを思い出している。それにしても、満州事変から先の大戦までの間に2回の野戦負傷で傷痍軍人となり、多くの戦記や写真を残しておきながら、決して私たち子どもに戦争体験を語ることはなかった。複雑な思いが交錯していたに違いない。

2015.12.21 日経歌壇から

粗相亡き老後のために鍛えませ一億総括約筋社会

(阪南 岡本文子) 選者：三枝昂之

選者評：短歌は自分の折々を保存するのが得意とする詩型だからこの1年の動きが浮かびあがる。突然提唱された一億総活

躍社会に反応した「一億総括約筋社会」は庶民の眼力を遺憾なく発揮して今年の政治批判の白眉だ。

⇒これは2015年の秀作に選ばれた作品。私は、この春からの体調不良で入退院を繰り返す間に生じた脚力の衰えに難儀している。このまま、車いすになるのは嫌だから、毎日脚力を鍛えるために歩いている。

2年位前から増えた体重を落とすため、糖質カットを行った。体重は適正になったが、気が付けば同時に筋肉の量も減少している。脚の筋肉ばかりか、総べての括約筋が減少したのだ。なるほど高齢社会は「一億総括約筋社会」がテーマになる。庶民の眼力を遺憾なく発揮している。

いく百の親が受験を終わりしか小学生らは会場出で来

(東京 上田国博) 選者：三枝昂之 選者評：なし

⇒この歌も2015年の秀作に選ばれた作品。北播磨に住んでいると中学受験など考えもつかないが、阪神間に住んでいると中学受験が関心事になる。兵庫県には灘、甲陽、六甲など有名私立中学校がある。大阪には大阪星光学院、奈良には東大寺、西大和などの有名私立中学がしのぎを削っている。

小学校高学年から、塾に学び、私立中学を受験する小学生の成功を祈りたい。いく百の親と子どもよ。もう少した。最後まで、しっかりがんばれ。

身の丈に合う生き方をしてきたが少し背伸びをしたい気もする

(長野 山口恒雄) 選者：三枝昂之

選者評：選び残したおおくからの一首。

⇒高齢になり、過去の生活を振り返りながら、「生涯、身の丈に合う生き方をしてきた」と謙遜しているが、「本当はもう少し背伸びして、やりたかったことがあったのだ」と若きころを思

い出しているのだろう。でも、よかったね。

先の歌のように、世相に限らず、身近な暮らしの襲や季節の変化を見つめて、そこに自分の哀楽を重ねている。短歌の醍醐味だ。